



越中八尾  
風の盆  
おわら

越中八尾  
ガイドマップ



JR越中八尾駅周辺



おわら歌碑

格子戸のある旅館宿、土蔵、造り酒屋など、風格ある佇まいの老舗や商家が軒を並べる八尾。文人墨客が当地を題材に詠んだ歌の数々が、辻々に建つ「おわら歌碑」に刻まれています。

わたしや野山の免じやないが  
月夜月夜に オワラ 逢いにくる  
野口 雨情  
八尾おわらをしみじみ聞けば  
むかし山風 オワラ 草の声  
佐藤 惣之助



おわら鑑賞(要予約)



石垣の家並み



越中八尾曳山展示館



和紙文庫



川崎順二像



若宮八幡宮



城ヶ山公園



諏訪町本通り



発祥碑



八尾ふらっと館



天満宮



八幡社



間名寺



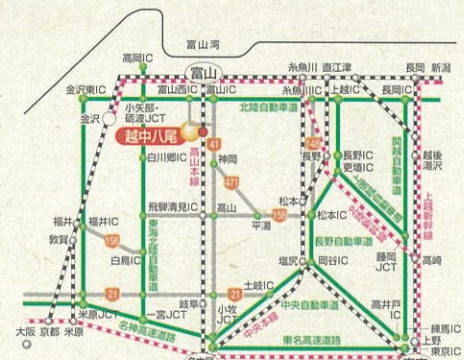
おわら資料館



越中八尾曳山祭(5月)

交通アクセス

- 所要時間
- 富山駅からJR高山本線で 25分
- バスで 45分
- 車で 35分
- 富山空港から車で 20分
- 富山インター(北陸自動車道)から車で 25分
- 富山西インター(北陸自動車道)から車で 25分
- 宇奈月温泉から車で 100分
- 立山・黒部アルペンルート立山駅から車で 60分
- 高山から車で 120分



お問い合わせ先

- おわら風の盆 行事運営委員会  
URL <http://www.yatsuo.net/kazenobon/>
- 越中八尾観光協会 TEL 076-454-5138  
富山市八尾山田商工会 TEL 076-455-3181  
富山市商工労働部観光政策課 TEL 076-443-2072

# 越中おわら

越中八尾が全国に誇る民謡「おわら」は、三百年余の歴史を持っています。その唄と踊りは、叙情豊かで気品高く、哀調の中に優雅な趣を有しています。「越中婦負郡志」によると、元禄十五年（1702年）、八尾の開祖米屋少兵衛の子孫が保管していた町建に関する重要秘文書の返済を得た祝いとして、三味線・太鼓・尺八・鼓といった鳴り物もにぎやかに、八尾の人々総出で町内を練りまわったことが「おわら」の始まりであり、その後、二十十日の風を治め、五穀豊穡を祈る行事に変わり、「風の盆」と呼ばれる行事に変化していったと言われています。毎年九月一、二、三日には、全町が数千のぼんぼりで飾られ、揃いの法被や浴衣姿に編笠をつけた踊り手が、地方（三味線や胡弓、唄、囃子、太鼓）が奏でるおわら節にあわせ踊り、町中を流し歩きます。おわら節の深みのある叙情性が日本人の心を打つのは、時代が求める形に改良を加えて洗練してきたからであり、音楽と踊りに芸術性を求めて変革に取り組んできた民謡は、おわらの他に例をみません。



## 越中おわら節

### おわらの踊り方 豊年踊り（田踊り）

（長バヤシ）

越中で立山 加賀では白山  
駿河の富士山 三國一だよ

（ハヤシ）

唄われようー わしやはやす

（唄）

八尾よいとこ おわらの本場  
二十十日を オワラ 出て踊る

合の手（ハヤシ）

唄われようー わしやはやす

（唄）

唄の町だよ 八尾の町は  
唄で糸とる オワラ 桑もつむ

（長バヤシ）

三千世界の松の木アー 枯れても  
あんだと添わなきや  
婆婆に出た甲斐がない

（ハヤシ）

唄われようー わしやはやす

（唄）

竹になりたや  
茶の湯座敷のひしゃくの柄の竹に  
いとし殿御に持たれて 汲まれて  
一口 オワラ 呑まれたや

合の手（長バヤシ）

春風吹こうが 秋風吹こうが  
おわらの恋風 身についてならない

（唄）

「春」ゆらくつり橋 手に手ととりて  
渡る井田川 オワラ 春の風

（唄）

「夏」富山あたりか あのともしびは  
とんで行きたや オワラ 灯とり虫

合の手（長バヤシ）

見送りましょうか 峠の茶屋まで  
人目がなければ あなたのへやまで

（唄）

「秋」八尾坂道 わかれてくれば  
つゆかしくれか オワラ はらはらと

（唄）

「冬」もしやくるか 窓押しあけて  
見れば立山 オワラ 雪ばかり

合の手（ハヤシ）

唄われようー わしやはやす

（唄）

見たさ逢いたさ 思いがつのる  
恋の八尾は オワラ 雪の中

（長バヤシ）

手打ちにされても 八尾のそばだま  
ちとつやそつとで なかなか切れな

（ハヤシ）

唄われようー わしやはやす  
おりて行きやれ 夫婦の雁よ  
越中田もよし オワラ 水もよし

（長バヤシ）

浮いたか瓢箪 かるそに流れる  
行先ア知らねど あの身になりたや



① 右足を左足前に出し、チョチョ  
チョンまで三拍右首横で打つ



② 右足を後ろに引いて、トンと打つ  
と同時に右体側でチョンと二拍



③ 右掌下左掌上にして前方へ出す  
（肩の高さ）右足前



④ 左右掌反対にして膝前まで下ろし左足前



⑤ ④と同じ手の形で、右足は後ろで  
トンと打つ



⑥ 左手そのまま、右掌を返して右  
前に開き、右足前、左足前



⑦ 右手そのまま、左掌を返して左前  
に開き、左足前、右足前



⑧ 右掌下左掌上にして、両手揃えて  
右方へ流す、右足前左足前



⑨ ⑧の動作を左方へ、即ち掌を  
反対にして、両手を左方へ流す  
左足前、右足前



⑩ 両掌内側にして体前向き  
に下ろし、外側へ返す  
右足そのまま、左足でトン



⑪ トンと下ろした左足を更に前へ  
踏み出し、右足膝少し曲げて前に  
上げ、両手顔の前方へかす



⑫ 前に上げた右足を左足後ろに  
下ろし、左右掌下にして右手  
左手を横に開いてきまる

## 「おわら」とは？

江戸時代に地元八尾の遊芸の達人たちが創作した七五調の唄の中に「おわらひ（大笑い）」という言葉が差しはさんで町内を練りまわったのが「おわら」と唄うようになったというものが、豊年祈願から菓の東が大きくなるようにとの思いからの「大菓（おおわら）説」、八尾近隣の小原村の娘が唄いはじめたという「小原村説」など、諸説あります。

## 「風の盆」とは？

二十十日の前後は、台風到来の時節。収穫前の稲が風害に遭わないよう、風の神様を鎮める豊作祈願が行われていました。その祭りを「風の盆」というようです。また、種まき盆、植え付け盆など、地元で休みのことを「ボン（盆）」という背景があり、呼び名の由来があるのではとも言われています。

## 各町の衣装



## おわら風の盆 9月1・2・3日

### 辻を流れる唄、踊り 編笠ゆれる風の盆

格子戸の旅籠宿、土蔵、造り酒屋——。昔の面影を残す町並みに明かりが灯るころ、どこからともなく聞こえてくる三味線、太鼓、胡弓の音……。鳴り物に合わせ哀調を帯びた唄声の流れはじめると、街道から、路地裏から、踊りの列が舞い集う。ぼんぼりに彩られた町を編笠の波が行き過ぎる。音曲のあわいに聞こえるかすかなせせらぎ。ゆかたの袖をかすめる秋風。いつ果てるとも知れぬ夢幻のうたげ——。九月一日、二日、三日—— 八尾はおわら。



## 「おわら」Q&A

Q1 女性の帯はなぜ「黒帯」なの？

その昔、おわらの衣装を揃えた際、帯まで手が回らなかつたので、大多数の人が持っていた冠婚葬祭用の黒帯を用いて踊った名残です。

Q2 なぜ笠をかぶるの？

風の盆の町回りが始まった当初は、照れや恥ずかしさから人目を忍び、手ぬぐいで顔をかくして踊ったといわれますが、それが編笠に代わったといわれています。

Q3 「踊り」はいつごろから現在のカタチになったの？

豊年踊り…大正九年、おわら節研究会の設立が契機となり現在のカタチに改められました。新踊り…昭和四年、越中おわら保存会の結成後若柳流の若柳三郎の振り付けにより現在の洗練された男踊り・女踊りの舞踊となりました。

Q4 「唄」はいつごろから現在のカタチになったの？

近世江戸の頃より八尾では長唄、浄瑠璃、義太夫などの謡曲、狂歌や川柳、言葉遊びの短詩を掛け合う舞句などがもてはやされていました。おわら供養の胡弓が締めりや 江尻 大兵の オワラ 声がする

現在のおわら唄を創ったといわれるのは名手江尻豊治、浄瑠璃の名手の息子として明治二十三年に生まれ、唄や三味線に長けており、今日、江尻調といわれるおわらの正調を完成させました。また、大兵こと伯兵衛は、独唱形式を確立させました。